

## 【報告】

# 間宮照子先生のこと

天 野 卓 哉

このたび、間宮照子先生（写真1）から名古屋民俗研究会に多額のご寄附をいただき、『名古屋民俗』第63号刊行の一助とさせていただきます。間宮先生は、長く愛知県内の民俗文化を中心に探訪され、津田豊彦先生や伊藤良吉先生とご一緒に名古屋民俗研究会やまつり同好会の活動に深く関わってこられた私どもの大先輩です。この度の間宮先生のご厚情に感謝申し上げるとともに、筆者自身の思い出と重なってしまうところもありますが、先生の業績をご紹介しますと思います。

間宮先生は1932年（昭和7）4月1日のお生まれで、住まわれる愛知県高浜市の文化財保護委員をお務めになり、最後は委員長として退任されました。高浜市は三州瓦の生産地として知られていますが、三河土器と通称される日常雑器の生産も盛んな地域でした。先生の生家は、三河土器でも「アカモノ」と呼ばれる酸化炎焼成で焼かれた甕や壺を製造していた製陶所でした。この製陶所で焼かれた甕の破片が、愛知県による豊田市足助地区の城山城跡の発掘調査で近代の遺物として出土しています（注1）。

間宮先生は高浜市の文化財保護委員として、高浜市の文化財保護行政に対して市域の歴史と文化の重要性について提言を重ねてられました。その成果として、市域の絵馬の集成（注2）と献馬習俗（おまん祭り）の調査報告（注3）などが挙げられます。これらの成果をもとに、大絵馬「高浜湊図」（春日神社蔵）やおまん祭り（高浜地区）が高浜市文化財に指定されるに至りました。名鉄三河線沿線の歴史をめぐる写真集の編集にも関わられ、高浜市内の3駅（高浜港駅・三河高浜駅・吉浜駅）について執筆されました（注4）。

高浜市以外の自治体の民俗調査にも積極的に参画されました。1992年（平成4）に安城市を中心とした西三河地方南部に分布する打ち囃子（チャ



写真1 間宮照子先生(芳賀日出男先生と一緒に)  
(2012年2月5日撮影)

ラボコ) について、その概要をまとめられました（注5）。愛知県教育委員会による「あいちの祭り行事」調査事業に加わり、刈谷市の万燈祭について執筆されました。報告書は2001年（平成13）に刊行されましたが（注6）、万燈祭自体はその前年の2000年（平成12）に愛知県無形民俗文化財に指定されており、間宮先生の調査が反映されたものと推察します。

三重県桑名郡多度町（現在の桑名市）の町史編さんでは民俗編の編集に尽力され、多度大社に伝わる献馬習俗「上げ馬神事」について執筆されました（注7）。高浜のおまん祭りの調査成果を受けてのことでしたが、ご本人からは「私、本当は馬って大嫌いなよ。だって、大きくて怖いじゃないの。『絵馬』ならいいんだけどね。」と笑っておられたのが印象的でした。

絵馬は間宮先生における民俗研究のテーマの一つです。絵馬師であった安田識人さんや岡崎市地方史研究会で活躍される嶋村博さんらとご一緒に「絵馬研究会」のメンバーとして勉強会を重ねられ



写真2 笹踊り(愛知県豊川市・うなごうじ祭り)  
(2024年4月7日撮影)

ていました。絵馬研究の第一人者であり、愛知県史民俗部会長だった岩井宏實先生が県史の調査で高浜市に入られたときは間宮先生が窓口となりました。

間宮先生には、もう一つ大切にしている研究テーマがあります。そのテーマとは、東三河平野部を中心に分布する「笹踊り」(写真2)です。笹踊りは、大太鼓一人・小太鼓二人の踊り子が三人一組になり、胸にはそれぞれ太鼓を抱き、唄に合わせて踊る太鼓踊りの一つです。1965年(昭和40)から1969年(昭和44)にかけての5年間、東三河の豊川・豊橋・新城・蒲郡に伝わる笹踊りを精力的に訪ねられ、1968年に調査報告をまとめられました(注8)。この調査報告は、笹踊りの基本文献として識者の間で知られています。

調査ではカメラを携え、笹踊りの様子を丹念に撮影されました。間宮先生は、この時のネガフィルムを大切に保管されており、当時の笹踊りの姿を記録に残そうと2024年(令和6)に『三河の笹踊り1965-1969』(以下、『三河の笹踊り』)を自費出版されました。1968年の調査報告では、誌面の都合により記述できなかったことも多く、忸怩たる思いをお持ちだったようです。コロナ禍の中で地域の祭り行事が激変する様子を目の当りにされ、およそ60年の年月を経て、当時の取材ノートを取り出し、改めて笹踊りに向き合われたのでした。本書は、1960年代(昭和40年代前半)における笹踊りの貴重な記録だけではなく、1967年生まれの筆者にとっては、間宮先生の民俗研究者としての執念

すら感じさせる一冊となっています。自分には、間宮先生にとっての笹踊りのようなテーマはあるだろうか・・・、そう自問自答せざるを得ません。

『三河の笹踊り』に掲載された写真はいずれも民俗写真として見事な構図を保ち、先生のカメラワークの力量がうかがえます。間宮先生の民俗写真は、西尾市教育委員会文化財課が管理するサイトでも、佐久島の八日講祭やてんてこ祭りについて閲覧することができます(注9)。民俗写真ばかりでなく、アート写真も撮られることもあり、碧南市にある画廊喫茶で個展を開催されることもありました(注10)。また、アプリケ作家の宮脇綾子(1905-1995)からアプリケの手ほどきを受けるなど美術愛好家の一面も間宮先生にはありました。

さて私事ですが、筆者は1996年(平成6)に高浜市やきもの里かわら美術館(以下、かわら美術館)学芸員として高浜市役所に採用されました。かわら美術館は、当初の構想では歴史博物館が企図され、間宮先生は瓦や瓦製作道具、製作技術などの有形・無形の民俗資料の調査・整理に携わっていました。筆者の入庁前に、かわら美術館は歴史博物館から美術館へと構想が方向転換されたため、間宮先生は民俗資料の調査・整理からは退かれました。筆者は文化財保護担当の学芸員として、幸いにも文化財保護委員のお立場を通して間宮先生から民俗学的なご指導ご教示をいただく機会に恵まれました。

いつの頃だったのでしょうか、間宮先生を東栄町布川の花祭にお連れした際、町内のコンビニに立ち寄りました。コンビニをご覧になって間宮先生はこうおっしゃいました。「私が花祭に通っていた頃はコンビニなどなかったわ。ゆで卵を何個も作って、熱いお茶を魔法瓶に入れて、まだ国鉄だった飯田線に乗ったものよ。便利になったものよね。」と感慨深げでした。花祭の見学中、何人かの女性の方に話を聞かれ、A5判のノートにメモをされていました。間宮先生は「今まで気になっていたことが確認できて良かったわよ。」と満足気でした。「それって何ですか?」と筆者は尋ねましたが、「それはね、アハハ」と笑い、はぐらかさてしまいました。今もって何を尋ねられたのか、不明です。

また、「民俗学、特にお祭りをやりたいのなら、津島の天王祭(愛知県津島市)と西浦田楽

(静岡県浜松市水窪地区) はしっかり見ておきなさいよ。」とおっしゃったことがありました。成程と思いつつ、これも今もって筆者は、恥ずかしながら成し遂げていません。

間宮照子先生からのご指導を活かし切れない不甲斐ない筆者ですが、2021年(令和3)に高浜市役所を辞して名古屋市役所に籍を移した今も変わらぬご厚情を頂戴しています。間宮先生に深謝申し上げますとともに、今後ますますのご健勝を祈念申し上げます。

## 注

- (1) 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター 2005 『城山城跡』(財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター調査報告集第122集)
- (2) 間宮照子 1983 『高浜の絵馬』高浜市教育委員会
- (3) 間宮照子 1989 『高浜のおまんこ』(高浜市誌資料8)高浜市教育委員会
- (4) 神谷力監修 1995 『保存版写真集 三河を走って85年』郷土出版社
- (5) 安城市歴史博物館 1992 『安城市堀内町の民俗』
- (6) 愛知県教育委員会 2001 『あいちの祭り行事—あいちの祭り行事調査事業報告書—』
- (7) 多度町教育委員会 2000 『多度町史 民俗』
- (8) 間宮照子 1968 「三河の笹踊り」『民俗芸能』33、民俗芸能の会
- (9) 「西尾歳時記—祭礼デジタルアーカイブ—」  
<https://nishio-saijiki.com/>
- (10) 画廊喫茶アトリエ「幻影の廊下と椅子の出会う場所 永島卓の詩と間宮照子の写真展」1990など